

農のニューズ
に
を過した
は迫力があ

田 枝

蹀返す夫を案
駢身ぶりは妻
で頭が下が
りやらんと
の寂しも夫
に迎への準
花活け赤飯

空本を襲った
を痛めてい
公さんが築
石垣地震に
り」と言わ
へからは作
浮かぶ。古
が芯は強く
語彙も豊か
り破綻がな
鳥も多く
楽しませて
ある。

る。春の野に放たれた奔馬はかつての豊かな福島そのものだろう。九年前の三月に起きた福島原発事故はこの土地から多くのもを奪った。自然であり生活であり平穏な心であり、決して奪ってはならないものを奪い取った。放たれた奔馬は失われた土地のいのちである。この春の野はもうかつての自然ではない。幻の奔馬の躍動する四肢は文明の愚かさを告発してどこまでも美しい。

本書は、著者の第十五歌集である。波汐國芳は福島島の郷土を詠い、東日蝶になる。黒蝶もまた彼岸をめざすのだ。疾駆する車内で被曝禍の中で妻を失った波汐には歌だけが残された。詠い続けてほしい。百日紅華やぐ道を走りつつ そのまま私は黒蝶になる

息子を育てながら、地球物理学の研究を長く重ねてきた作者の第三歌集。職場環境や自身の闘病など逆境とも言える状況で紡がれた一首一首には、虚飾のない率直な文体の奥にさりげなく豊まれた濃密な時間や感情があり、一冊を読み通すと、その意志的な生が質感と重量感を伴って頭ち上が

書かれたひたむきな「努力」があった。それをもってしても、中年の女性である作者には超え難い「研究者の壁」があり出向、働きながら



比喩と観察

江國梓歌集『桜の庭に猫をあつめて』 藤原 龍一郎

多彩な比喩の面白さを楽しめる歌集だ。一首一首に作者の神経が行き届いている。

四世代七人で囲むすぎ焼きは旅の途中の落ち葉焚きのやう
この「旅の途中の落ち葉焚きのやう」という比

え 漠然とは分かつてもそれが果たして正確な理想とした声調を明らか

て用いるのと同時に、予想外の方向に変化、移動
にため息が出るばかりでた論考といえるだろう。
ある。感服、脱帽する他
砂屋のクッキーの空き
伍」に喩えられている。
あの緑色っぽい伍が実家
にはいつでもあったのだ
ろう。クッキーを食べ終
わった後、何か別の用途
に使っていたのかもしれ
ない。そういうことは思
い当たる人もいるだろ
う。それが実家という見
立てがきわめて巧みだと
思うのだ。
比喩だけでなく観察
も鋭い。
本棚とベッドがひとつ
つづあるひと問「文藝
春秋」を読む父がある
ホームに父を訪ねた時
の歌。部屋の形状と「文藝
春秋」で父の風貌やた
ずまいが目につかんでく
る。その裏側には作者の
憂いが貼りついている。
この歌の前に「玉手箱あ
ける昏きに桜さく父のホ
ームの戸に手をかける」
があるが、この「玉手箱あ
ける昏さ」なる比喩も胸
に迫る巧さがある。比喩
と観察を支える具体とし
ての固有名詞が一首の中
で存在感を發揮してい
る。それを選択する作者
の感覚が信頼できる。
(角川書店・二二〇〇円)

ひたに真向かう

森尻理恵歌集『虹の表紙』 森川 多佳子

セッターなりき
手紙読み息子は静かに
この人に会う必要はな
いと言いたる
中高はバレー部の主将
として不器用に魅力的に

成長してゆく息子。闘病の母を気遣い、離婚以来初めて届いた父の手紙を
決然と却下し、アカハラを乗り越えて就職に就
く。鉄道の旅は楽しく、
地名に纏わる歌も興味深
い。
率直な医師の言葉に頷
きし息子部屋出て「重
いな」と言う
(青磁社・二七五〇円)

歌集紹介

吉村久子歌集 『風草のつた』

既刊六歌集より選んだ歌、歌誌掲載歌などをほぼ制作順に二七五首まとめた作品集。塔21世紀叢書第三四八篇。二〇一九年七月二十日発行。
花よりも名前の風情の好きな草力タカナ書きより漢字の風草

阿部幸子歌集 『七国峠』

裏庭に仰ぐ多摩丘陵(七国峠)を、嫁して十五年の歩みを題名に託第二歌集。草木叢書第六十七篇。令和元年七月二十九日発行。
嫁ぎ来しわがすむまの相原は多摩丘陵に添ひて思つゝ
(短歌研究社・二七五〇円)